

むきぼんだ花だよ！_{2月}

2017. 2. 4

◎ ナワシログミ (苗代菜萁)、グミ科、グミ属

別名、タワラグミ、トキワグミ。盆栽では、カングミ。名前の由来：稲の苗代を作る頃(4～5月)に果実が熟すことから。○常緑低木。本州中南部、四国、九州、中国中南部に分布する。海岸に多いが、内陸にも生育する。花言葉：「用心深い」垂れ下がる花とルビー色の果実は「野生美」。○茎は立ち上がるが、先端は垂れ下がり、他の木に引っ掛かり蔓性植物の癖になる。花は筒状の白い小さな花(斑点が目立つ)で、先端が4裂し数個下向きにつき10～11月頃開花、キンモクセイ(金木犀)に負けないくらい良い香りがする。春、4～5月頃赤く熟した果実(正確には偽果)は食べられます、また野鳥の好物でもあります。★葉は生薬の「胡頹子」(こたいし)として利用されます。★撮影日：2017,2,4 ★撮影場所：洞ノ原地区東側丘陵



ナワシログミの果実

◎ シラカシ(白欐)、ブナ科、コナラ属

別名、クロガシ～樹皮の色が黒っぽいから～、ホンバカシ。「高木・常緑広葉樹」名前の由来：材がアカガシに比べて淡い色のため、あるいは葉の裏が白っぽいから。○花言葉：勇気、力、長寿、～緑起の良い木と云われる～○本州(福島県以西)、四国、九州、济州島、中国中南部に分布する。「雌雄同株。雌雄異花」○幹は真直ぐに伸び、大木は20mにもなる。樹皮は灰褐色で4～5月頃若葉と共に尾状の花序を付け、秋にはドングリが実る。カシの中では細めの葉で、ウラジログガシに似るがウラジログガシは葉裏がより白っぽい葉縁が波打っているので区別される。★用途：公園、庭園、生垣、街路樹に多く植栽される。材はカシ類で最も良質で利用は多岐にわたり器具材、建築材、船舶材、シイタケ原木等に利用される。果実はカクス、リスの好餌、葉はムラサキシジミの幼虫食草。★撮影日：2017,2,4 ★撮影場所：洞ノ原地区東側丘陵



シラカシの冬芽



キツタの果実



ナナホシテントウとアブラムシ

◎ ヒカゲノカズラ(日陰蔓)ヒカゲノカズラ科

ヒカゲノカズラ属*ヒカゲノカズラ植物門に属する代表的な植物です。蘿(かげ=ヒカゲノカズラの古名、コケの意味か)という別称もある。他にキツネノタスキ、テングノタスキ、ウサギノタスキ、カミダスキ、ヤマウバノタスキ、等の俗称「牧野植物図鑑」もある。広義のシダ植物ですが、その姿からは巨大なコケを思わせませぬ。名前の由来：日陰の蔓で、日向にでることを意識した名の説もあるが、良くわからない。日陰の蔓を当てる事もある。花言葉：想い出。○山野に自生する多年草で、つる状で地面を這っている。針状の細い葉が一面に生え細長いブラシの様な姿です。胞子は、夏頃に茎の所々から、垂直に立ち上がる緑色の枝を出し先端近くで数回分枝、先に淡緑色の胞子のう穂を付ける。胞子は石松子(セキショウシ)と呼び湿気を吸収しにくいので丸薬の衣や、リンゴの人工受粉の際、花粉増量剤として使用される。また傷に塗って止血めとした例も有るそうです。*北半球の温帯から熱帯域(沖縄を除く)の高山にまで見られ、広く分布するため変異も多い。湿った日向の傾斜地によく生育するが、あまり湿地には生えない。林道周辺などでよく見かける。★この植物や似たものを祭事に用いる例がある。一説によれば、天岩戸の前でアメノウズメが踊った際に、「ヒカゲノカズラ」を素肌に纏ったとも言われる。古事記には「日陰を纏にかけ」とあり、この日陰がヒカゲノカズラであると言うのです。万葉集にも「ヒカゲノカズラ」の名があるそうです。現在でも、京都伏見稲荷大社や、奈良の翠川神社ではいろいろ祭事に使用されているそうです。●ヒカゲノカズラ科は、日本で約20種類あるそうです。夏の胞子のう穂を確認したいですね。！★撮影日：2017,2,4 ★撮影場所：洞ノ原地区東側丘陵



ヒカゲノカズラ



アオモシ



シシヤンパング、(日本あつたのこ)に本しか見当たらず(後採られたと思はれます残念)



キミノシロガモの冬芽

【七草】について調べてみました。

七草(ななくさ)は、人日の節句(1月7日)の朝に、7種の野菜が入った粥を食べる風習のことです。元々の「七草」は秋の七草を指し、小正月のものは「七種」と書き、この七種も「ななくさ」と読めます。一般には七日正月のものを七草と書くなど、現代では元々の意味がうすれて、風習だけが形式として残りました。この事から人日の風習と小正月の風習が混ざり、1月7日に「七草粥」が食べられるようになったものと考えられます。人日(じんじつ)とは、五節句のうちの1月7日で、3月3日(上巳、じょうし)5月5日(端午、たんご)7月7日(七夕、しちせき)9月9日(重陽、ちょうよう)です。五節句を制定したのは、江戸幕府で制定した時点で1ケタの数字と同日だけを、節句としたという説が有力です。その意味では1月1日が節句のはずですが、1月1日は1年の始めの特別な節日の日として、節句にしないで代りに設けられたのが人日の節句のようです。なぜ7日なのか? ○中国では1月初めの数日を動物の日と定め、1日鶏、2日犬、3日羊、4日猪、5日牛、6日馬、7日人、と呼んだそうです。1月7日は人の日で犯罪者の処罰も行わなかったと云われ、この日が人日の節句に選ばれた様です。～(人日は、作業量の事で何人前のことです。)★五節句の説明が長くなりました。

◎七草の歴史古くより日本では、年始めに雪の間から芽を出した草を摘む「若菜摘み」という風習があり、これが七草の原点とされています。また中国の「荆楚歳時記」に「人日」(人を殺さない日)である旧暦1月7日に七種菜羹(しちしゅさいこう)と云う七種類の野菜を入れた羹(あつもの、とろみのある汁物)を食べて無病息災を祈る習慣が記載されており、この事から今日行われている七草粥の風習は、中国の「七種菜羹」が日本において日本文化・日本の植生と習合して生まれたものと考えられます。

春の七草 ー (粥にして楽しむもの) ー

- ☆春の七種とは次の7種類の植物です。
- *せり「芹」セリ～セリ科
- *なすな「薺」ナスナ(べんべん草)～アブラナ科
- *ごぎょう「御形」ハハコグサ(母子草)～キク科
- *はこべら「繁縷」コハコベ(小繁縷)～ナデシコ科
- *ほとけのざ「仏の座」コオニノタヒラコ(小鬼田平子)キク科
- *すずな「菘」カブ(蕪)～アブラナ科
- *すずしろ「蘿蔔」ダイコン(大根)～アブラナ科
- 「仏の座」は、シン科のホトケノザとは別のものです。
- 春の七草の簡単な覚え方。～「せり なすな、ごぎょう はこべら、ほとけのざ、すずな すずしろ、これぞ春の七草。」～五・七・五・七・七のリズムです。～

秋の七草 ー (目で楽しむものです) ー

- ☆秋の七草は以下の7種の野草のことです。
- *おみなえし「女郎花」オミナエシ～オミナエシ科
- *おばな「尾花」スキ～イネ科
- *ききょう「桔梗」キキョウ～キキョウ科
- *なでしこ「撫子」カワラナデシコ～ナデシコ科
- *ふじばかま「藤袴」フジバカマ～キク科
- *くさ「葛」クス～マメ科
- *はぎ「萩」ハギ～マメ科

●山上憶良が詠んだ2首の歌がその由来とされています。

- ◆秋の野に咲きたる花を 指折り(およびをり)かき数ふれば七種(ななくさ)の花(万葉集・巻八 1537)
- ◆萩の花 尾花 菊花 瞿麥(なでしこ)の花 姫部志(をみなへし)また藤袴 朝顔(あさがお)の花(万葉集巻八 1538)
- 「注」「朝顔の花」は、桔梗とする説が最も有力だそうです。

○秋の七草の簡単な覚え方 ～「はぎ ききょう、くさ おみなえし、ふじばかま、おばな なでしこ、これぞ秋の七草」だそうです。～五・七・五・七・七のリズムです。～
他に、頭文字の語呂合わせで「ハスキーなおふくろ」とか「お好きな服は」など

夏の七草 1945.6.20,日本学術振興会学術部・活用研究小委員会が、戦時中の食糧難の時に**食べられる植物**として、七種類を「夏の七草」に選定しました。さらに、戦後の1945.9.10,雑誌と同じ内容のパンフレットが出版されました。

- *あかさ 「藜」アカサ～アカザ科
- *いのこづち「猪子権」イノコツチ～ヒユ科
- *ひゆ「莧」ヒユ(ハゲイトウ・葉鶏頭)～ヒユ科
- *すべりひゆ「滑児」スベリヒユ～ヒユ科
- *しろつめくさ「白詰草」シロツメクサ～マメ科 NO. 4
- *ひめじょおん「姫女苑」ヒメジョオン～キク科
- *つゆくさ「露草」ツユクサ～ツユクサ科

昔の七草 起源はハッキリしない様ですが、中国から伝わってきたようです。ー「味わって楽しむもの。」ー

- *いね「稻」イネ～イネ科
- *あわ「粟」アワ～イネ科
- *きび「黍、稷」キビ～イネ科
- *ひえ「稗」ヒエ～イネ科
- *ごま「胡麻」ゴマ～ゴマ科
- *あすき「小豆、苺」アズキ～マメ科
- *みの「粟米、粟」ミノゴメ、ムツオレグサ～イネ科

☆「夏の七草」、「昔の七草」とともに**簡単な覚え方が**分りません。みなさん考えて自分で作ってください。【七草】終り。



ハナゴケ

◎クリタマバチの「抜け殻」(栗玉蜂)

タマバチ科の昆虫の1種で、中国大陸に自然分布し、第二次世界大戦中に旧日本軍が苗木を日本に持ち込んだ際、同時に持ち込まれた外来生物です。1941年に岡山県で初めて確認され、その後全国に拡大した。クリの生育を阻害する害虫です。タマバチ科は植物防疫法の定める検疫有害動物です。雄成虫は未発見で、雌成虫が単為生殖し、栗の新芽に卵を産み、孵化して潜り込み、瘤状の赤色みを帯びた「虫ごぼ」を作る。それで実が付かなくなる。虫が脱出すると瘤はそのまま枯れ落ちる。防除法として日本在来の土着寄生バチの「クリマモリオナゴバチ」を用いた生物的防除や抵抗性品種の育成等が試みられましたが十分な効果が上げられませんでした。★撮影日：2017,2,4, ★撮影場所：洞ノ原地区東側丘陵

◎ハナゴケ(花木毛,花苔) ハナゴケ科、

ハナゴケ属。子嚢地衣類。別名・異名：コケノハナ、トナカイ。別名の「コケノハナ」は、褐色の子器が子柄の先端に着いて花の様に見えることから。トナカイは、極北地域ではトナカイの餌になることから。「分布」：北海道、本州、四国、九州、北半球に広く分布、南アフリカにも分布。*ハナゴケは苔の仲間ではなく、地衣類です。地衣植物は菌類と藻類の共生体です。日当りの良い高山の地上や岩山、低地にまで分布し晴天時は乾燥して、踏みつけると砕けて粉々になり、雨が降ると水を吸収してしなやかな生き物らしくなる。尾根筋など痩せたアカマツ林などに群生することが多い。また、ツンドラ地帯にも生え、冬季のトナカイの餌になっている。日当たりの良い痩せた地味の見られる。高さ3～10cm程度。最も条件の悪い立地で痩せ地の指標種です。～可愛い小さな花です。～★撮影日：2017,2,4, ★撮影場所：洞ノ原地区東側丘陵



クリタマバチの「抜け殻」(栗玉蜂)



立春の大山 (日野川堤防から撮影)



ホオジロ?のさえずり!一筆登仕り候!

★むきばんだを歩く会★

- 指導：鷲見寛幸先生(鳥取県自然観察指導員)
- 毎月第1土曜日午前9時30分～正午
- 入会金 2000円 毎回資料代 300円 いつでも、どなたでも入会可能です
- 問い合わせ：むきばんだ応援団「むきばんだをある会」